

第一章 転校生は幼なじみ!?

第二章 布団中のお嬢さま!!

第三章 やきもちお嬢さま大作戦

第四章 初めてのデート

第五章 恋人は幼なじみ

登場人物紹介

Characters



とおなぎ みう
遠風 美羽

絵里栖の世話をする忠実な少女メイド。明るくおしゃべり。

ひめのみや えりす
姫乃宮 絵里栖

裕太の幼馴染み。大企業社長の令嬢。気位が高く、天の邪鬼な性格。

もりむら ゆうた
森村 裕太

気の優しい少年。大人しく争いごとが嫌い。

(お……おちんちんっ!! い、いやあ……っ!)

節くれ立った幹に青筋を浮かび上がらせ、過剰な充血に赤黒く色づく。

目にしただけでぞわぞわと寒気が走るのに、なぜかいつまでも見続けてしまう。

(うう、こんなの……を、え、えっちするときって、こ……これを、あそこの中につ!? う、うそでしょっ、こ、こんな気持ち悪い……変な形したのを……!? それにおっきいし……。こ、壊れちゃうわよ、こんなのが入ってきたらっ!! じよ、冗談じゃないわっ!)

先へいくほどに太さを増している気がするその先端は、抉ったような括れに被さるように肉の傘が大きく張り出し、鈍く先端を尖らせていた。こんなものに、身体の中を穿られると考えただけで怖くなってしまう。それでも反り返って間断なく打ち震えるグロテスクな逸物から怖いもの見たさで目が離せない。

(ま、まだ、あの白いの……出てないようね……。で、でも、なんか、液みたいのいっぱい出て、濡れてるし……。す、すごい、匂い……)

肉頭の先端に口を開けた小さな穴からとろとろと透明の粘り汁が溢れて、幹全体をぬめらせていた。生臭く饅えたその汁の匂いが、布団の中いっぱいに満ちてしまい、息をする度に頭がボーっとなつて、身体が火照ってきてしまう。

なんだか下っ腹の奥の方がムズムズと疼いてしまつて、気持ち悪いようなもどかしいような気分に着かなくなる。

(これ……、本当に、あそこ、挿入^{はい}するのよね? 初めての時は、痛い、みただけ……)

段々、気持ちよくなる……って……)

怖いながらも興味は十分にあるが、それは心に決めた人としたかった。その相手が、裕太なのは分らない。いや、たぶん、違うような気がした。

(別に……ただの幼馴染みってだけなんかもん……)

なんだかんだいって、彼と再会出来た嬉しさは誤魔化しようがない。けれどもそれはただの懐かしさであって、恋愛などとは違う気がする。恋に陥る感覚というのはもつと夢のようにすばらしくて、それ以外なにも考えられなくなってしまいうに違いない。

そんな素敵な感情が、再会早々のい組み合いから生まれるとは思えなかった。

裕太からは、もどかしい、いらいらとした落ち着かない気持ちしか感じないのだから。

そんなことより、どうせ退けられぬのならいっそのこと、幼馴染みの変なおちんちんをじっくりと観察して、いつか自分が好きな人とえっちする時の参考にしてやろう。

(でも、こんなのが入るなんて、女のあ、あそこ……って、どのくらい開くの……かな……)

……? 赤ちゃんが、出てくるくらいだし……でも、えっちのときは……)

こんなことなら、自分で触って確かめてみればよかったかもしれない。

なんとなく、唇を綻ばせてどのくらいだろうかと想像してみる。

(たぶん、このくらいには……広がる、のかな……?)

指で開いたその唇をなぞりながら、目の前の男根と見比べる。

(直接、口でくわえればよく分かったりなんかして……あはは……)

そんなこと本気であるはずなく、あくまでも冗談でそう思ってみる。

ゾクンと、胸が震えた。

いくらなんでもはしたなすぎる。しかも幼馴染みのペニスになど。いまこうして直に見てしまっているだけで、相当に恥ずかしいことだというのに。

それなのに……、布団の中で誰も見ていないことが絵里栖を大胆にしていた。

間近から匂ってくる膣えたような牡の香りも、判断力を狂わせていたに違いない。

(うん。太さ、計ってみる……ただだから……)

実際に触れるつもりはなかった。ただ、近づけてサイズを確かめるだけのつもりだった。ドキドキと胸を高鳴らせながら恐る恐る顔を寄せる絵里栖の、布団の中で蹲った身体が前にのめりすぎてバランスを崩す。

「はわっ!? ん——ッ! んむぐっ!!」

裕太の無防備な肉勃起を、絵里栖の唇は大胆に啜え込んでしまった。

熱く滾った怒張肉の脈打ちに、口蓋を震わせられる。

(はうう……。これがあ、ゆうくんの、おちん、ちん……)

口いっぱいには広がる膣えた風味が、こうなったらもう仕方がない気分にしてしまう。

目にした時には嫌悪感を抱いていたというのに、牡臭い香りを間近でたっぷりと嗅いでしまったせいだろうか、それほど悪くないようにさえ思えてくる。

(え……えっちな、気分になっちゃってる? あたし……。——こんな、えっち、だった

んだ……あたしって……。でも……お、幼馴染みだし、最後までしちゃうわけじゃないし……いい、いいよね？ 男の、確かめる、だけ、なら……)

幼馴染みである少年の布団の中という淫靡ながらも居心地のよい空間が、絵里栖を大胆にさせていた。

唇を塞ぐ牡幹の逞しさに意識を朦朧とさせ、少女はそのまま感触を味わい始めた。

「——くうおあッ！」

なんとか喘ぎは嘔み殺したが、背中が大きく波打ってしまった。

(な、なに……してんだっ!? これ……って！ 絵里栖、まさか……っ!?)

いきなりジャージがめくれた時にも、思わず立ち上がってしまったようになるほどびっくりにした。風呂場での仕返しだろうかと思っただが、こんなやり方では絵里栖自身のダメージの方が大きすぎるはずだ。

柔軟に蠢く壁が幹肌にもっちりとはばりつき、軽い圧迫感をもって締めつけてくる。

その中で、縦横無尽にのたうつ柔らかな肉ペラが、おずおずと勃起の固さや大きさを探るように擦ってくる。

(き、気持ちイイ……よ、これ……っ！ こんなこと、を、え、絵里栖……がっ!!)

初めて味わう快感だが、それがなんなのか容易に想像がついた。

興奮気味の荒い鼻息が陰毛をこそばゆく揺らし、艶やかな長い髪が内股を擦ってくる感

触が、裕太の推測を裏付ける。

(く、口でっ!! 僕の、舐めてるっ!)

臆病で甘えん坊だった幼馴染み。すっかりと気位の高い美貌のお嬢さまへ成長を遂げていた彼女が、なにを考えているのかペニスを口に咥え込んでしまっている。

困惑と興奮が膨れあがり、勃起竿を一段と膨張させる。すると布団の中で股間に顔を埋めている少女の身体が一瞬怯んだように震えたが、それもつかの間。すぐに、むしろ踏ん切りがついたかのように大胆な舐めしゃぶりを始めてしまった。

(くっ! ああ……。な、なに……。考えてッ!! 自分のメイド、ここ、いるってのにつ!)
太幹の感触を確かめるかのように唇を窄め根本を締めつけてきた。その上で口中に満ちた生暖かな唾液を掻き混ぜながら、竿の裏側を先端に向かって舌の先でなぞってくる。

「——!! んんっ! ふ……。ああ……。っ!!」

実に拙い、粗雑な舐め方だが、少年には十分すぎる衝撃だった。

ベッドの上で脚を投げ出し座っているのに、バランスを失いよろけそうになった。

甘い歓喜が浮き立って、脳裏を軽く痺れさせる。

「どうなされたのでありますか? もしかして、お風呂の件で湯冷めされて風邪でも!?!」
不自然な身震いに、美羽が心配そうに眉を寄せる。

「う、うん……。そう、みたい……。ちよ、ちよつと、寒気が。でも、大丈夫ッ、だから……」
咄嗟に取り繕いながらも、裕太は看護しようと近寄る彼女を制する。



「温かくして、横になられた方がよろしいのでありますよ」

「う、うん……今日は、早めに寝ることにするよ」

それでも心配げな美羽をなんとか追い出そうと、就寝をほのめかす。これ以上、近くに寄られたら、どうかこの部屋にいられたらすべてばれてしまう。

実際に、もぞもぞと蠢く絵里栖の身体がさっきよりも布団を持ち上げてしまつて妙な盛り上がりになつていた。裕太が膝を立てている振りをして誤魔化すが、近くで確かめられたら中にもう一人いることが分かつてしまひそうだ。

「それより、え、絵里栖、だけど、もしかしたら母さんのところにもいつてるんじゃないかな？　ん……はふう……。さ、さっきも小さい頃の、話で弾んでた、し……」

その話の内容のほとんどが、裕太がしでかした恥ずかしい思い出だつた。

裕太の母を味方に、本人さえも忘れかけていたような過去の汚点を論あげつちい、勝ち誇つたような笑い声を上げていた少女が、いまは一心不乱にペニスを頬張っている。

胸が締めつけられるような興奮に勃起肉がますますいきり立ち、ドクッ、ドクンッ、と打ち震えてふんぞり返る。

「んふぐうっ！」

布団の中で悩ましい呻きがくぐもる。美羽にまで聞こえたのではと裕太が恐る恐る横目に様子を窺うと、息苦しさに喘いだらしい口蓋が亀頭の上側を荒っぽく擦つてきた。

「——ふあわわっ！　ん……ふ、う……ッ!!」

焼けるような熱が尿道の奥にまで染み入った。フェラチオのやり方など知らぬはずの少女だが、偶然の動きがやたらと男根の敏感部を刺激し、幼馴染みの少年を困らせてしまう。慌てて美羽から目を逸らし、喘ぎを飲み下す。相手の姿が隠れているだけに、なをされるのか予想がつかない。戦々恐々としながら快楽に耐えるだけで精いっぱい、わなわなと背筋を震わせる。立てた膝の高さを超えて彼女の尻が迫り上がってきてしまい、布団を整える振りをして手で押し戻す。

「——女の子の、お尻ってっ!! こんな、ふわふわなのっ!!」

くにゅん、と、柔らかく拉げる感触が分厚い布越しだというのに生々しく掌に焼きついて、直に触れてしつかりと確かめたい衝動に駆られる。その上、触られた絵里栖の方もふるると感極まったように身震いすると、いまがどういう状況なのかを一瞬で忘れ去ってしまったかのように口奉仕を大胆にした。

「——にゅぽっ! むちゅっ!! くちゅ、ぐちゅっ! ぬろっ!! じゅぶるっ!

「か……っ、ハアッ………ああ、あ、あ、あ……っ!!」

よく叫んでしまわなかったものだと、裕太自身も思った。

「(こん……な、ことっ! 絵里栖がっ!?)」

良家の子女が通う名門の学園から来たというのに、その大胆な振る舞いに当惑した。もしかすると上品ぶった学園の方が、性に関しては乱れているのではと邪推までしてしまう。(もしかして……こ、こんなこと、する……のも、初めてじゃない、のか……?)

彼女ほどの美貌ならば、付き合っていた相手がいたとしても不思議ではない。

(え、りすは……ぼ、僕の、幼馴染みつ、なのにつ！)

そう思った途端、強烈な嫉妬と独占欲が胸を掻き乱す。

こんなことやめさせようと思っていたのに、彼女の好きにさせてしまう。

「——ンッ！ ふぁうぐっ!! ひゅ、ひゅーふんっ！ むぁぐううっ!!」

——ぬびゅぶっ！ ぶじゅぶじゅぶっ!! ちゅばっ、じゅばちゅばあ——ッ！

その彼に応えるように、くぐもった声で子供の頃の愛称を不明瞭に呼びながら、口中にタップリと溢れた唾液ごと、太勃起を激しく啜り上げてきた。興奮に任せたがむしろやり方だが、下手な技巧がないだけにストレートに裕太の情欲を刺激する。

「はひぁあつ！ はぁ……ンンうううっ!!」

もう裕太の喘ぎは誤魔化せるレベルではなかった。眉根を寄せて鼻孔を膨らませ、メイドの前でぶるぶると全身を歓喜に打ち震わせる。

布団もかなり捲れ返って、その中で蹲って幼馴染みのペニスにむしゃぶりつく少女の、汗濡れた亜麻色髪が見えてきてしまう。

美羽の視線から隠すように慌てて腕でカバーする。

「ん〜、やはりお嬢さまは、奥様のお部屋にお邪魔しているでありますかねえ？」

「う、うん……そう、きっと、母さんと、話、していると、思、う……ッ!!」
メイドに話を合わせようとするのだが、情けなく声が震えた。

「——ひうつ！ だめっ、だっ!! 美羽……そう、美羽ちゃん、まだいる、のにつ！」
面白い物を見つけたという様子で、絵里栖の掌が裕太の睾丸をこねこねと弄んでいた。尾てい骨が浮き立つような心許ない脱力感に焦るのだが、ふやふやに解れた感触が面白いらしくて放してくれない。

——ぬちゅっ!! にゅぶっ！ ぬぼぬぼぬぼっ!! ちゅっばあ——っ！ むじゅっ!!
その間にも唇は赤黒い充血怒張を唾液でべちよべちよにしながらストロークする。ここが弱点と悟ったのか、舌が亀頭の裏側を鈴口へと這い上るように執拗に舐め擦ってきた。

（ひああああっ！ も……だ、だめっ!! 我慢、できな……出ちゃ……うつ!!）
海綿体の脈打ちは一拍ごとに激しさを増し、幹の直径を膨張させる。

「んむふううつ!! ふえあつ、ふ、太ひいっ！ はう、ゆーふあ、お、おひんひんっ!!」

「げふっ!! こほん、ごほっ！」

漏れてくる絵里栖の喘ぎを咳払いで誤魔化すなか、ようやく眼鏡メイドが出て行くそぶりを見せる。

「ああ、いけませんね、長々とお邪魔してしまって、裕太さんのお身体に障るのであります。もしかすると、お嬢さま、すでに部屋に帰られているかも知れませんので、私も戻るのであります。それではおやすみなさいませー」

「あふあ……うつっ!! お、やす……みいっ！」

深々とお辞儀をし、やっとのことでメイドが部屋から出て行った。

「はふあつ！ んぐつ！！ んむう、んむむむうつ！」

——ぬぶぬぶぬぶつ！ ぬぼんつ！！ にゅちゅつ！ ぐじゅつ！！ ねちゅねちゅつ！

「ひうあはあああつ！！ え、えり……すつ！ だつ、だああつ、だめつ！！」

絵里栖の唇ストロークが速さを増して、裕太の脳裏を灼熱に染めて追い詰める。

（く、ふ、あ、あああああつ！ 出る出る出るっ、もう出るっ、出ちゃうっ！！ こんなの、

だめだつ、気持ちよすぎるからっ！ 絵里栖の口で、出させられちゃううううっ！！）

限界はもうとつくに超えていた。

尿道に押し寄せる強烈な切迫感で脳裏が真っ白に染まる。

「ぐ……あ……も、だ……め……っ、出ちゃ……」

強張った少年の身体がぐくと前のめりに崩れた。

突き出された両手が、布団を被ったまま突き上げられた幼馴染みの尻の両房をむんずと

驚掴みにする。

「ふわうむつ！！ んああふうううああつ！」

分厚い布越しもなんのそので柔らかな熟れ肉へと食い込む指に、少女が一段と尻を突き

上げた。たわわな豊球が掌いっぱいに押しつけられる。その刹那、

「く、ふああああんうううううあああああはああ——っ！！」

——びゅどびゅびゅうううっ！ どびゅつ！！ ずびゅびゅつ！ びゅぶつ！！ びゅるる

るうううっ！ ずびゅずびゅびゅつ！！ どびゅびゅ——ッ！

自分の股ぐらのどこにこれだけの量かと思うほど大量の精液が、怒濤の勢いで鈴口からぶちまけられた。

どぶっ！ どぼどぼどぼおっ!! ぶじゅじゅぶじゅうっ!

「んむうううっ！ くはっ!! かふっ、はああああ——ンンッ！」

口蓋と舌に圧迫される狂おしさのなか、小さな唇の内側に収まりきらず飛沫を散らして溢れ返る白濁を、幼馴染みが喉をグビグビと蠢かせて飲み下していた。

（あ……う、嘘……。絵里栖が、飲んでるっ！ 僕の、汚い精液、飲んで……）

嬉しいのか恥ずかしいのか分からない感情が熱く沸き立って、背筋がゾクゾクと震えた。（ああ……ま、また、出しちゃった……。こ、今度は、絵里栖の、口……中に……。でも、さつきと違って、絵里栖が咥えたり……。するから……。——な、なんで、こんなこと？）

幼馴染みの心地よい体臭を押し退けて栗の花のような噎せ返る汚臭が立ちのぼるなか、脱力が全身を蝕んでくる。

「——うわうっ！」

握りしめていたままだった尻を慌てて放す。

すると投げ出した両脚の狭間で熱く火照った彼女の美身がビクンと打ち震え、上に被さっていた布団をはね除けた。

「え……絵里栖……。あ、あの、その……こ、これは……っ!!」

狭苦しい中での淫靡な行為に全身が蒸され、しつとりと汗ばんでいた。肌には亜麻色の長

「ふあうっ！ は……………あ、ああああああっ！！」

亀頭の先がさらに奥へと抉り込んで子宮を容赦なく突き上げた。

激感に幼馴染みが仰け反って、悲鳴と共に背筋を痙攣させる。

「は……………うっ！！ んうああっ！ そんな……………な、され、たらっ！！ で、出ちゃ……………っ！」

じつとりと汗ばんだその背中を支えながら、海綿体を絞ってくるヴァギナの感触に、ほんのさつきまで童貞だった少年が追い詰められた。

女の子と、しかも麗しいお嬢さまへと成長した幼馴染みとのセックスに、挿入る前からペニスの内側に狂おしい塊が込み上げてきていた。

初めて味わう続けざまの甘美に、もうこれ以上その衝動を堪えきれそうにない。

——ぬぶるっ！ ぶぼっ！！ むばっ！ にゅじゅっ！！ ずむっ！ じゅしっ、ぬぢっ、ぐじゅぶっ！！ にゅつちやっ！ ずぼっ、ずぼっ、ぐじやっ、ぶずぼっ！！

このままでは避妊具もつけていないのに、彼女の膣内に放ってしまう。抜かなくてはと思うのだが股間が全く言うことを聞かず、ますますストロークが激しさを増す。

「ひああっ！ んあふあああうっ！！ あ、ああああああっ、だ、だめえっ！ ンうううっ！！ 奥ッ！ い……………いっばいっ！！ 当たって……………ふわあああうっ！」

初めて突き穿られるヴァギナの激しすぎる悦感に、絵里栖が戸惑いの表情で喘ぎ狂う。

「く……………ッ、ふああっ！ 腰っ、止まらないっ！！ 出るッ、出ちゃうっ！ これ……………じゃ、絵里栖……………ッ、んなかああっ、射精ちやううっ！！ ふあうふうううっ！」

——ぬぐぐぶううっ!!

それなのに細い腰をいっぱい引き寄せて彼女を抱き締め、鼠蹊部を一段と密着させる。突き上げた子宮を押し潰さんばかりに圧迫する。

その衝撃に嬌声を引き攀らせながら、幼馴染みが告げる。

「んひああああっ! や、やくそく……だからっ!! ゆーくん、の、およめさん、なるっ、てえッ! だからっ!! ゆーくん、本気……ッならっ! 膣内ッ、射精し、て……ッ!!」

夕暮れの丘の上で交わした約束。子供同士のたわいのない誓い。けれども……。
言葉で答える必要はなかった。ただ込み上げる衝動に逆らうのをやめる。

「く——ッふあああああううっ!! あふああああああああつ!」

——どっぴゅうううっ! びゅぶびゅぶびゅびいっ!! ぶじゅっ! ぴゆるぴゆるびゅぶっ!! ぶびやぶばああああ——ッ!

幼馴染みとの約束に思いを込めて熱濁を解き放つ。狂おしい痺れに脳を焦がされながら、尿道が弾けそうな勢いで裕太は、存分に彼女の膣内へ精液をぶちまけた。

「——ひあああああうっ! んくううあああああつ!! あああつ! ふああああああつ!!」

押し上げられた子宮へだめ押しとばかりの熱飛沫を浴びせられ、絵里栖の身体が戦慄いた。裕太の膣内射精に歓喜の笑みを満面に浮かべ、一気に高みへと昇り詰める。

——ぶじゅ——っ! ぴしゅっ!! ぶじやぶじやじゅばあああああ——ッ!

少年にすがりつきながら幼馴染みが、絶頂に全身を波打たせた。

大量のスペルマでぬめった鬚穴の奥底から、熱い子宮汁が噴き出して白濁と入り混じり男根をくわえ込んだ膣口からこぼれ落ちる。

「ふ……はあああ……っ!!」

「はう………んんっ!」

甘く饜^すえた情欲の香りにまみれ、頭の中が真っ白に染まっていた。無我夢中の想いに全力を注ぎ込み、裕太と絵里栖は力尽きたようにベッドの上に崩れ横たわる。

(ふ………ああ………絵里栖の、なか………あ、気持ち、イイ………のに………)

ペニスが膣から抜け出て、散々快楽をむさぼったというのに名残惜しさを感じてしまう。余韻に浸りながら荒い息を整える余裕も持たず脱力した上体を持ち上げると、傍らの幼馴染みものろのろと四つん這いに身を起こしてきた。

「ゆーくん………」

ほつれた亜麻色の髪が、汗濡れて火照った顔に貼りつきゾクつとするような色気を醸^かし出す。清楚な純白の制服がしどけなくはだけて、悩ましく蕩けた肉体を背徳的に飾る。

もうすでに男根が狂おしく脈打っていた。生唾が口中に溢れ思わず飲み下す。

「あたしたち、ずっと離ればなれ、だったから……。だから、あたし、もっと、ゆーくんを感じたい……から………」

横顔を向けたまま恥じらいの伏せ目がちでねだる様が可愛らしくて、どうにかなくてし

まいそうだ。

「え……絵里栖ッ!!」

求められるまでもない。裕太もまったく同じ気持ちだった。

まだ四つん這いのままで夢見心地な瞳を彷徨わせる後ろから、覆い被さるように彼女を抱き締める。

「きゃうっ! ゆ、ゆーくんっ!!」

いきり勃つペニスでスカートを捲りあげ、そのまま突き込もうと腰を迫り出す。

「ひゃわっ!! う……後ろ、からっ!」

びっくりはするが幼馴染みは拒もうとはしなかった。それどころか桃形の肉感的な尻を自分から積極的に迫り上げて彼を迎えようとする。

「く……ンッ!」

ぬちゅ、とぬめった感触が先っぽに触れた。

「——ひゅはあっ! えっ? あ……っ!! ち、違……っ、そ、それ、お尻……っ」

絵里栖が慌ててなにか言ったが、興奮のあまり耳に入らない。

これ以上ないほどの心地よさだった挿入の感触をまた味わいたくて、潤んだ窪みに肉竿を押しつける。——さっきよりだいぶ硬かった。

「ひうううっ! や、やあああっ!! そっち、ち、違う……のおっ! だめっ!! ダメっばっ、ゆーくんっ! お尻ッ、挿入^{はい}っちゃ……あ、あああああっ!!」

窄まった肉門が、さつきはすんなりと受け入れてくれたというのに、今度は処女膜以上の抵抗を示している。

「あ、ぐううっ!! 絵里栖ッ、膣内ああっ!」

じらされると余計にむきになってしまふ。彼女が慌てて腰を引こうとするが、細腰を捕らえて逃してあげない。滲み出るカウパー液の潤滑に任せて、固く絞られた門の僅かな隙間をこじ開け強引に先端をめり込ませる。

——ぬうううッずううっ! ぐじっ!! ずつぶっ! ズッ!! ずぞっ! ぶずっ、ぶずぶずっ!! ぶっ! ずうううっ!!

「——ッ!! きうううっ! んはあああああっ!! あぐううううんんッ!」
野太い呻きが細い喉から絞り出される。緊張させた全身をガクガクと激しく震わせ、直腸へと無理矢理押し入ってくる極太の衝撃に堪え忍ぶ。

ギョーンギョーンと膣壁よりも無骨な壁襞が、異物を排出しようと強烈に締めつけてくる。
「ふあううっ! す……凄イッ!! あ、はあああああっ! 締まるッ!! え、絵里栖ううっ! 膣内あああああっ!!」

その圧迫を彼女がさつきよりも感じているのだと誤解して、裕太が昂ぶり狂う。

「ひやうっ! だ、だか……らっ!! んっ! ンンンッ!! そこ違うっつてっ! や、やあああっ!! だめっ! だめだめええっ!! う、動いちゃッ! ひはあああっ!!」
どうにか間違いを気づかせたいのだが、肉欲に舞い上がった少年は耳を貸す余裕もなく、

彼女も尻穴を穿られる豪快な刺激に言葉がしどろもどろに途切れてしまう。

その最中ついに、快楽にはしゃぐ裕太の容赦ないストロークが繰り返される。

「ずぶぶつ！ ぬっじいっ！！ ずぐっ！ ぐぶんっ！！ ぐじっ！ にゅぶぶつ！！

「はがああっ！ うぎううっ！！ き、きつうッ！ くっ、ふはあああっ！！ や……ああああつ！ おしりいいっ！！ 壊れちゃ……あ、ふああああつ！ んうううっ！！」

前穴よりも重々しい響きが奏でられた。

慌てて分泌される腸内液の潤滑があるとはいえ、本来は排泄するための器官に勃起しきつた極太の男根を突き込まれ、絵里栖がパニックに陥りかける。

「あふううっ！ す……すぐ、イイッ！！ キツキツだよっ！ 絵里栖の、腔内^{なか}ああっ！！ う、後ろからだどっ、こんなにつ！ はあああっ！！ も、もう、出そうッ！」

経験の足りなさ故に、間違つた穴に挿入してしまったことにまったく気づいていない。突き込む度にギュッ、ギュギュッ！！ と過激な締めつけをしてくる強靱な直腸襞の感触が気持ちよすぎて、幼馴染みが苦しげに蠢く様を彼女も感じているのだと思込んでしまう。

「こ、これからもっ！ いっぱいっ、絵里栖とエッチしたいっ！！」

細腰を掴んでいた手をスカートの下に潜り込ませ、乳房に負けず美麗な桃尻に熟れた乳房へと指をめり込ませて揉み捏ねる。

「えっ、えっちいいっ！ イイッ、けどっ、ダメッ！！ ふあああつ、だめえええっ！ お尻いいっ、そんなしたらあああつ！！ はっ！ はわあああううっ！！ んぐはあああつ！」

尻肉をむぎゅっと押し込まれると、直腸を刮げる剛直の刺激が一気に高まってしまふ。ガクガクとしなやかな腕が脱力して震え、幼馴染みは上体を支えていられず胸から上を布団に突っ伏してしまった。

「——はあうっ！ え、絵里栖ううッ!!」

自然と尻を急角度に突き上げることとなってしまい、裕太のストロークが上から打ち下ろされる状態となった。

——ずんむっ！ ぶずぶっ!! ぐっじゆるっ！ ずぶるっ!! ぬずっ、ずんむっ！

直腸液のヌメリは一段と増し、奥深くへの抽送を円滑にさせる。

「ひぎいいっ！ はうっ!! やああっ、う、嘘おっ！ こんなっ、違うっ、のにいいっ!! な、なにかっ来るッ！ 来ちゃうンんうっ!!」

腸壁をダイレクトに挟られる容赦ない刺激から、潤滑で和らいだストロークでS字結腸を弾かれる小気味よい衝撃へと移り、幼馴染みの感覚も急速に変わりゆく。

(あはああっ！ 奥ッ、イイんだっ!! 子宮、強めにコンコン突き上げるとッ、絵里栖、気持ちいいんだっ！)

少年がまだ勘違いしたままのなかで、込み上げてくるものを堪えようとしているのか、それともさらに刺激を得ようとしているのか、絵里栖はストロークに合わせて自分からくねくねと尻を振りたくる。

「はうっ！ はふうっ!! おしっ、お尻イイイッ、でええっ！ こんなあ、気持ちッ!!」



んん気持ちいいっ！ お尻でっ、なんてええっ！！ だめっ！ イクッ！！ イッチャううう
ううっ！ ふあああ——ッ！！

ビクン、ビクンと、早い振幅の痙攣に身を振らせ、切羽詰まった嬌声を進らせる。

「ふああっ！ ぼ、僕もっ、出るッ！！ 気持ちいいっ！ 絵里栖ッ！！ ぬああううっ！」
彼女が絶頂する予感と共に、灼熱の込み上げが尿道を満たす。

頭の中を真っ白にする快感が股間から昇り詰める。

絵里栖も同様に、背筋を弓なりに反らせ、突き上げた尻房を痙攣させていた。

「えり……すううっ！ くはあああああ——うっ！！」

「ひあはああううっ！！ ゆーたっ、ばかあっ！ はううっ！！ あふあああ——っ！」

——どどどどどびゆるるっ！！ ぶびゅっ！ びびゅびびゅぶびゅばああああああっ！！

——ぶしゅうっ！ ぶじゅううっ！！ じゅぶっ！ じよぼっ！！ ぷっしやああああああっ！

勘違いのAnalセックスだというのに、心を通じ合っているかのように同時に達した。

直腸の奥底に濃厚なスペルマをぶちまける衝撃に、挿入が果たされなかったヴァギナから、不満を述べるような熱潮が激しく噴きこぼれる。

（くふあああああっ！ あたま溶けちゃうっ、これっ！！ え、絵里栖も、すごい気持ちよさ
そうで……お尻の穴、イイッって……。——!? え、お尻……って？）

窮屈に陰茎を絞られながら射精する歓喜に朦朧となりながら絵里栖の嬌声を反芻し、裕太はようやく自分がいまままでどこにペニスを入っていたのかに気がついた。

彼女のクラスメイトへの洞察に感心しながら、不機嫌の原因ではと疑っていた事柄を口に出してしまう。しまった、と思つた瞬間、絵里栖の顔が見る見るうちに真っ赤に熟した。

「ば、ばっかじゃないのおっ!? そんな……こと、あたし……ッ! 別に……」
気にしない……。ちよつと……。……き、気持ち、よかつた……。し……」

裏返つた声で叩きつける『ば、ばっかじゃないのおっ!?』のあとは、しどろもどろの上、消え入りそうなほどの小声でよく聞こえなかつた。

藪蛇やぶひびをつついてしまったのではと裕太が身を強張らせる。

だが絵里栖は赤らんだ顔で彼をキッと睨みつけながらも、もじもじと落ち着きなく両手の指を前で絡み合わせ、拗すねたような口調で言つた。

「わ………悪いと思つてるなら……、今度は、ちゃんとしてよ……。こ、ここで……」
「——へっ!?」

もちろんここは学園内。しかもそろそろ休み時間も終わろうかという時。さらには、美羽にスマタで射精させられたところを絵里栖に見られてしまった因縁の視聴覚室である。

「だ、大丈夫よ! 今日はこの部屋使うクラスないもん……きちんと調べたから……。それに、鍵も中からかけたし……」

彼女も先日のことを思い出したのだろう、身構えてしまう裕太を安心させるように言う。授業で使うと思つていたため鍵を閉めるわけにはいかなかつたこの前と違って、それなら安心かもしれない。正直言つて絵里栖とエッチしたくないわけがない。しかも向こうから

誘ってくるなんて、それだけで興奮に胸が躍おどつてしまう。

けれども何事にも不測の事態というものがある。

それに、他者に自分たちの関係を知られるがいやだと言ったのは、彼女の方なのに。

「なんで……いきなり、こ、こんな所で!? 学園の中なのに、ま、ま、まずいよっ!」

尻込みする少年に、しかし幼馴染みはますます不満げに唇を尖らせる。

「だ、だつて……ッ! しかたないじゃないっ!!」

目尻が吊り上がった輪郭のはつきりとした顔立ちの絵里栖は、怒っている時が一番美しいかもしれない。強い眼差しで睨めつけられ、思わずうつとりと見とれてしまう。

「やつと、ゆーくと仲良く……なれたんだからっ! それに、——あ、あんな、気持ち……いいなんて……えっちが……。あたしだつて、が、我慢……できないもん……」

思いを遂げた相手に甘えたいのは、絵里栖も同じなのかもしれない。しかしプライドの高いお嬢さまには、人前でべたべたといちゃついたりそれ他人にからかわれたりするのは、耐えられないことなのだろう。相反する感情の葛藤の末に、美羽にも協力してもらい二人きりになるため裕太を誰の目も気にしなくていいこの密室へ誘い込んだに違いない。

「え……絵里栖……!?!」

そのことに気がつかなかった少年が、幼馴染みの消え入りそうな告白に狼狽える。見つめ合ったまま二人とも、競うかのように顔を赤く火照らせてゆく。

「ゆーくんだつて、こ……こんなになつてるじゃないのっ!!」

少し前から興奮に疼いていたのに、股間を隠すのを失念していた。そのもっこりと盛り上がったズボンの前を真っ赤に恥じらいながら指摘して、幼馴染みが詰め寄ってくる。

「はわっ！ し、仕方ないだろっ!! 絵里栖が、へ、変なこと言うからっ！」

以前ほど動転して取り乱すことはなくなった。それでもやはり女の子に勃起知られるのは恥ずかしい。反射的に後ずさろうとしたが机に邪魔される。

その隙に、気の強い顔立ちの少女は、裕太の間近でおもむろに膝立ちに身を沈めると、問答無用でファスナーを引き下げてしまった。

「ば、ばかっ！ やめ……ッ!!」

——びゅるんっ！

阻止する余裕がまったくなかった。膨張した陰茎がパンツの前を割り開いて弾けるように飛び出してきてしまう。

「ふぁ……っ!!」

赤黒く充血した太い肉の硬棒に、自分から導き出しておきながら絵里栖が驚きの溜息を漏らす。その生暖かい吐息が、張り詰めた裏筋を擦った。

「ん……く……」

熱い細波が海綿体を痺れさせ、たまらず背筋が震えてしまう。

蕩けるようなその刺激をもっとせがむように、剛直がビクビクと蠢いて尿道の奥からヌルヌルとした透明の雫を滲ませた。

人目がないことで大胆になっているのはむしろ絵里栖の方だった。ペニスとキスをするように、亀頭の先端に窄めた唇をそっと触れさせる。

「ふううんっ!!」

刺激としてはたいしたことないはずなのに、その様を見ていたらわけの分からない興奮が膨れあがって心臓が弾んでしまった。自分からも股間を迫り出しかけてしまう。

「裕太って、おつきいおっぱい、好きでしょ？ あたしだって、結構成長したんだよ……」
それは実際に触って実感していた。だがもつと念入りに味わえとでも言うかのように、絵里栖は唇の先でちゅぽちゅぽと鈴口を啄みながら、白いジャケットの下に着けた黒いブラウスの前を大胆にはだけける。

「——ひうっ!! な、なんで、ここでおっぱいっ!」

たわわな房が、ぶるん、と波打って溢れ出た。

幾重にも波打つ柔らかな感触が、少年の掌に蘇る。

もう一度揉み回したくて両手を差し伸べてしまう。彼女は美房をしつかりと保持する薄桃色のブラジャーを外し、隠された部分をさらけ出した。

「——あ、ああ……え、絵里栖……ッ!?!」

真っ白な肌が雪のようだった。それでいて触れてもいないのに温かさが伝わってくるような生々しい肉感に目が釘付けとなってしまう。

むっちりとした房はほどよく発酵して膨らんだパン生地のように、生き生きとした弾力

に溢れ、つつけばそのまま軽やかに弾み出しそうだ。

それでいて彼女の僅かな身じろぎにも忠実に反応を示し、くityんと柔らかかに形を歪ませ、惑惑的な柔らかさをアピールしている。

なにもしなくても寄せて上げたように二つの房が押し合い、谷間が深く刻まれている。思わず見とれていると、下着の支えがなくなってもたわむことなく、ツンと張り詰めた丸房の頂で、円周の小さな乳輪にぶつくりと屹立した薄紅の豆粒が小刻みに脈打つ。

(え、絵里栖……だって、気持ちよく……なつてっ！こ、興奮して、乳首勃つてるじゃないかっ!!)

口に出して指摘してやれば、いくらか主導権を握れたかもしれない。そのことに気がついたのも後の祭りだった。

「これで、んちゅ……。ゆ、ゆーふあを、あむ……。き、きもひよふ、ひへあげうね……」ぬぶぬぶと先端を啄んだ唇で亀頭全体を吸い込んでゆきながら、幼馴染みが自ら両手で抱えた美乳の谷間に脈打つ怒張の太幹を挟み込んでしまう。

「はおおうっ！ふああ、は、んあああああっ!!」むっちり汗ばんだ餅乳房が、満遍なく幹に貼りついて包み込む。

指で握られるのも気持ちいいが、蕩けるような充足感が比べものにならない。それに加え、熱く濡れそぼる口腔が亀頭だけに狙いを集中して弄び出す。

——れろっ!! にゅむっ! くちゅくちゅっ!! にゅるるるるっ!



「ふああうんっ！ あ、ふううっ!! く、口と、おっぱいっ！ 一緒に、だなんてっ!!」
まるで美味しい飴玉を転がすように舌が上下左右に舞い踊り、感度抜群な先端部分を舐め回す。それだけで意識が真っ白に染まるような快感が股間で弾けているというのに、絵里栖は青筋の浮き出た太幹を抱き包んだ肉鞠にくまりを上下に揺さぶり始める。

——にゅむっ!! ぽふっ！ ぬりゅっ!! ぷにっ！ ぷりゅっ!! わりゅりゅっ！
(き、気持ち、よすぎいいっ！ こんな、の、ちんぽっ、どうにか、なっちゃうよっ!!)

熱く蕩けた柔肉に密閉され、まるで無重力の中を漂うような喜びが硬く張り詰めた牡竿に染み渡る。カウパーと彼女の唾液と汗が入り混じり、ねちゅねちゅと淫らな音色が、浮き立つような心地よさと共に大きさを増す。

口だけでもまだ慣れない様子なのに、乳房での扱きまで同時に行い大変そうだ。しかし上目遣いで少年の反応を時折窺いながら一生懸命に奉仕してくる。その拙さ故の刺激が、不器用な幼馴染みらしくて愛おしい。

「ん……………んぐっ、ゆーふああ、き、気持ち、いい……………? お汁……………いっふあい、出へるふえろ……………おひんひん、気持ち……………いい……………」

聞かれるまでもなかった。気持ちよすぎてどうにかなりそうなくらいだ。柔房に張り詰めた幹を擦られ、裏筋から鈴口までを舌で勢いよくぺろん、と舐め上げられる。その度に、尿道へと押し寄せる圧力に屈してしまいそうになった。その射精欲を我慢したまま、

(う……………ぐ……………も、もっ……………)

この快感を味わい続けていたい。けれども、このままだと頭が変になってしまいうさだ。
「あ、あ、あ、ふううっ！ えりい、すううっ！！ ぼ、僕ッ！ 僕もうっ！！」

乱れても艶やかな亜麻色の髪を、両脇に結んだ赤いリボンごと指に絡ませ、彼女の頭を両手で抱え込む。熱い息を喘ぎに乘せて吐き出しながら、快楽に迫り上がる背筋を前屈みに折り曲げ幼馴染みに覆い被さるようになる。その瞬間、

「——んむっ、ふ……」

絵里栖が両脇から乳房を押し潰して谷間に挟み込んだ剛直幹を圧迫した。

細めた舌先で鈴口を穿りながら、唇を強めに窄めて雁首の溝を目一杯締めつける。

「ひぐううっ！」

なにをされたのか理性が一瞬で弾けて理解出来なかった。ただ灼熱の快感が、制御を失って股間から脳髓へと突き上げられる。幼馴染みのちよつとした意地悪に逆らうように、勃起の直径が増して海綿体が打ち震えた。尿道を一気に奔流が駆け上る。

「くうはあああああううっ！ で、るう、ふあがあああ——ッ！！」

——どびゅっ！！ どびゅどびゅどびゅっ！ びじゅうっ！！ びゆるうううっ！！

「んぶううっ！ い、ふあい……出はああつ！！ ゆーふあの、精子いッ！ かふううっ！！」
彼女に覆い被さるような前屈みで鉢の小さな頭を抱え込み、噴き出す熱濁に痙攣する。
狭い口腔をいっぱい満たすドロドロの白い汚汁に、幼馴染みが歓喜した。

「んぐ……ッ！ はぶうっ！！ んくっ！ けふっ！！ ふ……はああ、あむぐうううっ！！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!